

滋賀支部  
彦根城



幕末期の江戸幕府で大老を務められた井伊直弼の居城である彦根城は、天守が国宝指定された現存天守であり、ほぼ創建当時を維持しています。滋賀県は琵琶湖をはじめ世界遺産の比叡山延暦寺など観光資源に恵まれています。ぜひお越しください、ひこにゃんもお待ちしています。

滋賀支部・支部長 近藤真弘さん

奈良支部準備委員会  
生駒山



奈良支部の自慢は、なんといってもスカイツリーより8メートルも高い642mの「生駒山」。頂上には生駒山上遊園地。そして美しい夜景が堪能できる生駒スカイラインへドライブに来られた方も多いためでは？そんな山の麓、職場の生駒役所屋上からの1枚です。

奈良支部準備委員会・世話人代表 改正大祐さん

兵庫支部準備委員会  
阪神甲子園球場



ダルビッシュや松坂大輔など多くのスターを生んだ「高校野球の聖地」であり、日本で最初に誕生した野球場としても知られる「甲子園球場」。もちろん、我らが阪神タイガースの本拠地です。

兵庫支部準備委員会・世話人代表 官渡伸次さん

和歌山支部  
和歌山城



関西国際空港から約30分。緑豊かな虎伏山に白亜の天守 - 和歌山のシンボル「和歌山城」がそびえ立つ。御三家の紀州徳川家の居城は、日本100名城にも選ばれました。今年、5代藩主・吉宗公が8代将軍に就任して300年を迎えます。

和歌山支部・支部長 山下直也さん

支部対抗

全国タワー自慢



表紙に登場した「通天閣」にあやかって、全国の校友会各支部に、ご当地の「タワー自慢」をしていただきました。  
■鉄板のタワー自慢 ■歴史ある塔や城郭自慢 ■意表をついたシンボル自慢、いろんな「どんなもんだ！」が集まりました。お近くにお越しの際は、ぜひ、立ち寄ってみてはいかがでしょうか。

**中国支部 国分寺五重塔**  
中国地方には、特にこれといったタワーはありませんが、中国のシンボルである岡山県岡山市にある「国分寺五重塔」をご紹介します。高さ4m余りの木造本瓦葺き、青銅製の相輪をいたたくは社殿「天保十四(1843)年に再建された」といいます。現在は国の重要文化財に指定されています。  
中国支部 支部長 筒井弘祐さん

**九州支部 福岡タワー**  
福岡の名物は、決してラーメンと明太子だけでは有りません。アジアの玄関口としての機能を果たした近代都市であり、人々をこたえさせる貴重な気候もまた多岐にわたります。この地域です。中でも、いまのシンボルである「福岡タワー」は、福岡の文化と近隣諸国へ発信しています。  
九州支部 支部長 岩崎剛さん

**沖縄支部 ザ・ビーチタワー 沖縄ホテル**  
沖縄には、東京タワーやスカイツリーのような有名なタワーはありませんが、唯一「タワー」と呼んで、自慢できるのが「ザ・ビーチタワー」です。ザ・ビーチタワーは、沖縄ホテルのシンボルであり、ザ・ビーチタワーには、沖縄の歴史が刻まれています。毎日、大勢の人が「ザ・ビーチタワー」を楽しんでいます。  
沖縄支部 支部長 神崎光さん

**東京支部 東京タワー**  
東京スカイツリーの完成後も、まだまだ根強い人気を誇っている東京タワー。1958年12月に開業して、以来57年の歳月が経過しましたが、東京の観光名所として今なお健在です。また、東京タワーをモチーフとした映画「ドラマ」も数多くあります。  
東京支部 支部長 島田仁三さん

**東海支部 名古屋テレビ塔**  
名古屋市中区栄、久屋大通公園にある「名古屋テレビ塔」。銀色に輝く高さ180m、1954年日本で初めて造られた集約電波塔です。アナログ放送終了とともに、テレビの電波塔としての役割は終わりましたが、スマホ用のメテオ発信塔として、現在も変わらず東海地区のシンボルです。  
東海支部 支部長 高井聖さん

**京都支部 京都タワー**  
京都と言えは、京都駅の島中央口前に建ち立つ「京都タワー」。高さ131mと市内で最も高い建築物です。白い円筒状のランドマークは、鮮やかなイメージを思い起こさせ、五重塔を模した見立、海のない京都市内の街を照らす灯台がイメージしたか、原稿執筆にあたって、明らかにした事実：まさに、灯台下暗し、ともいえます。  
京都支部 支部長 矢島秀さん

**四国支部 ゴールドタワー**  
瀬戸大橋を渡る途中、自に入ることになる「ゴールドタワー」。高さは158m、瀬戸大橋が開通した1989年にオープン。日本では、黄金に輝く「ゴールドタワー」とも呼ばれ、夜になるとライトアップされ、その色は翌日、天気によって変わる。通天閣と同様に地元住民に愛されるタワーでもあります。  
四国支部 支部長 中川輝さん

交遊誌・ホームページ掲載希望者募集 (掲載対象) 国内外問わず、道大卒業生で、校友会会員であること (ジャンル) ○グルメ (飲食・お菓子) ○旅行 (ホテル・旅館・旅行代理店) ○住まい (不動産・住宅・相談) ○医療・福祉・介護・保険 ○学校・予備校・塾・カルチャー ○スクール ○美容院・エステサロン ○DIY・製造など (掲載料) 無料 (ご注意) 内容などにより校友会の承認が得られない場合、掲載のしなかる場合もあります。予めご了承ください。また、届け出の連絡が取れない場合 (例えば電話が通じないなど)、閉店などが認められた場合には掲載を中止させていただきます。(掲載申し込み) 校友会ホームページからの申し込みになりますので、ご理解とご協力をお願いいたします。

登録募集!! 「誰どこ何してるシステム」

http://otemon.org/daredoko/

「誰どこ何してるシステム」とは、追手門学院大学校友会が運営する会社やお店を幅広くご紹介しているサイトです。ご近所の校友のお店や会社なども見つけていただけます。追手門学院大学の校友だけがの特典が付くという嬉しい情報もあります。皆様、どしどしご登録をお願いします。



一編集後記

この度、創刊号を発刊する運びとなりました。ご登場いただいた方には、忙しい中にもかかわらず対応していただき、誠にありがとうございます。追手門学院大学には個性にあふれ、利発な方が多いことに驚愕しています。様々な分野で、社会貢献をいとわず成長する自分を楽しみ、日々過ごされている姿がまぶしく感じました。大学で学んだ時間を大切に、そして、何よりも追手門学院大学に対しての思いの強さを感じる事が出来ました。この大学を測る物差しは何なのでしょう？偏差値？スポーツ？社会有為な人材として真に当にまじりに社会に貢献するという人材偏差値ではどこにも負けない大学だと思います。このLinkA、様々な分野で活躍されている方をこれからも取り上げてまいります。ご期待ください！  
(道大つながって委員会事務局・小林武則)



発行・編集：追手門学院大学校友会「道大つながって委員会」  
〒567-8502  
大阪府茨木市西安威2-1-15  
TEL:072-643-6135 FAX:072-643-6099  
URL: http://ogu-koyukai.com E-mail: info@ogu-koyukai.com  
発行日：2016年11月1日

OGU **LinkA**  
追手門学院大学校友会 交遊誌 リンカ

2016/11

創刊号

「道大つながって委員会」



てっぺん、めざせよ!!

通天閣を「日本一面白いタワー」に！  
母校と大阪・新世界をこよなく愛す  
永遠の「追手門ボーイ」。

2003年に、通天閣観光株式会社の第12代表取締役役に就任して以来13年、西上さんは、常に大阪、そして通天閣にひとかたならぬ愛情を注いで活動してきました。「大阪を盛り上げるためには、No.1のキタ以上にNo.2の新世界ががんばらねえと、大阪らしさを壊さず、昭和の匂いが残るこのまちをもっと元気にしていきたいですね」。かつては眺望で売っていた通天閣でしたが、西上さんは大胆な方向転換を行いました。「通天閣は、もはや高さで売れる時代ではないんです。「日本一面白いタワー」つまり、「大阪らしさ」で売っていかないと生き残れません。それには、半歩先をゆくオンリーワンの企画が必要でした」。そこで、通天閣ロボットの開発やジャズコンサートの実施、ビリケンさんのフロアをつくるなどの斬新な企画を実施しました。さらに、話題作りのために、自ら仕立てた金のスーツに身を包んで会見に臨んだり、ビリケンの着ぐるみを着てイベントに登場したり...。「僕が就任した頃の来場者数は70万人ほど。「80年代の19万人という底の時代に比べれば増えてはいたんですが、来場者数100万人、年間10億円、優良企業化の3つを目標にがんばって来ました。最近やっと目標が達成できてきたように感じています」。そんな「面白人間」の西上さんに白羽の矢が立ちました。今年度より追手門学院大学の「実学研究所」の客員教授に任されたのです。「卒業して40年以上経って、再び母校とつながることができて、本当にうれしく思っています。これからも何らかの形でお役に立てたらなによりです」。在学中はゴルフ部に所属し、今でも当時の仲間と集まっているという西上さん。母校愛は誰にも負けないと言いつつ切られます。「最近、巷で「東の慶応、西の追手門」という声が聞かれます。僕もこれからは「追手門ボーイ」と呼ばれるのかな」と顔をかかれます。誰よりも大阪を愛し、追手門学院大学を誇りに思う西上さんは、通天閣のようにわが追手門学院大学のランドマークとして、これからも大活躍されることでしょう。



**西上 雅章さん**  
Masaaki Nishigami  
1974年卒業 (5期生)  
経済学部 経営学科  
●通天閣観光株式会社  
代表取締役社長  
●追手門学院大学  
実学研究所 客員教授  
http://www.tsutenkaku.co.jp  
nishigami@tsutenkaku.co.jp  
f 西上雅章 検索

# 追大生だったからこそ、今の自分がいるのです。

運命的な出会いがあったり、画期的な気づきがあったり…。追大生にとって、キャンパスで過ごす時間は、未来の自分を育てるための大切な糧となります。今回は、個性的な4人のOB・OGにご登場いただいて、キャンパスライフの思い出や将来の夢についてお伺いしました。



## 好奇心の赴くままに軽快に行動する。 言葉と音楽を通して、人とは何かを伝える 川柳人は、コミュニケーションの達人。

「入学してから1年間は、あまり学校へ行かずに、マンガ家のアシスタントをしていたんです。だから、残りの3年間で4年分の単位を取り、なんとかギリギリ卒業できました」と笑う小林さん。彼を奮い立たせたのは、ゼミの福井南海男先生の厳しい言葉でした。「僕の甘さを見抜いた先生は“人生をナメていいのか！”と一喝されたんです。そこで“ハッ！”と気がついたんですね。これは真剣に生きねばと、結局は、叱ってくださる先達のおかげで、人生を踏み外さずにここまで来れたんだと思っています」。

学生時代は、文芸部に所属。寺山修司が好きで、戯曲や短歌などの創作に励んだといいます。また、当時NHKが放映していた『あなたのメロディー』という音楽公募番組に作曲者として応募して、見事採用となり、主宰者の時実新子さんから“入会しませんか”とお誘いをいただきましたと小林さん。時実さんは、『有恋恋』というベストセラーの句集がある川柳のトップランナー。小林さんは、そんな人の直弟子となったのです。

以来、自ら川柳をつくるだけでなく、時実さんの会員誌『川柳大学』の選者や執筆を担当。週刊朝日の川柳コーナーで大賞を受賞するなど、川柳界で活躍します。

「川柳はコトに寄せて人を詠みます。人に関心がないとつくれません。好きでも嫌いでもいいのです。人に無関心にならない限り、いろんな人と出会って、遊び、学んだ学生時代に、人への関心が育ったんでしょうね。仕事で辛いことがあっても、人への関心が心を運んでくれたように感じています」。

現在、小林さんは、勤めていた会社を退職し、時実さんの遺志を継いで『現代川柳研究会』の会員として川柳の普及に励んでいます。まだまだ知られていない川柳をもっとたくさんの人に楽しんでもらいたいと、川柳講座を開いたりしているのです。同時に音楽活動も。童謡コンサートの企画やコーラスの編曲、飲食店のテーマソング作曲、自らのライブなどもしています。好奇心の赴くままに、軽快なネットワークで人生を謳歌する小林さん。4年間のキャンパスライフで育まれた自由な心が、彼の未来を後押ししているようです。



**小林 康浩さん**  
Yasuhiro Kobayashi  
1980年卒業(11期生)  
経済学部 経済学科  
●川柳作家  
●NPO法人童謡館東京 理事  
●作曲家・編曲家  
abok-78214@sutv.zaq.ne.jp

f 小林康浩 絵案



恩師・田中先生とのツーショット



## 教えてもらったのは挑戦する心。 追大との運命的な出会いが 私を追大初の弁護士へと導いてくれた。

「追大を選んだのは、実は空手をするためだったんです。空手の先生が追大出身の方で、大学で空手を続けるなら追大に行こうと思ったのがきっかけでした。学科を選ぶ時、“何をするか一番よくわからないところに進もう”ということで心理学科を選びました」と手塚さんは振り返ります。そんな動機だったので、学部生の4年間は、空手とバイトに明け暮れ、“なんとなく”毎日過ごしていました。

そんな手塚さんの意識を変えたのが、大学院の恩師でした。「高名な社会心理学者の田中眞夫先生の研究室に入ったのですが、ここでの経験が私の人生を変えたといっても過言ではありません。まず、心理学の本当の面白さを教えていただきました。先生は、単なる心理学を超えて、社会学や文化人類学、哲学などの領域にまで研究対象を広げ、“人間に関わるすべて”を解き明かそうとしているように感じられました。結局、私は、その広さ、深さに挫折してしまいました(笑)、視野は大きく広がりました」。

田中先生にかわいがられた手塚さんは、大学院4年目には、先生と先生の奥様と共々3人でアメリカを旅します。いわば、先生からの卒業旅行のプレゼントでした。そんな中、再び手塚さんに転機が訪れます。当時、交際中だった現在の奥さん(研究室の後輩)の妹から司法試験受験の誘いを受けたのです。彼女が言うには“これからの弁護士は、法律の勉強だけではなく、広く社会での経験を積んだ人材が求められる”と。手塚さんは、1年間考えて、ついに司法試験受験を決心します。2003年、33歳でした。

この年、手塚さんはプロポーズします。“司法試験を受けるから、結婚して支えてほしい”と。臨床心理士になっていた彼女は快諾し、二人三脚の司法試験挑戦がはじまりました。2年間の司法試験勉強の学習の後、3年ほどの自習期間を経て、2008年の秋、ついに司法試験に合格しました。その間、2007年には、父となっていました。

「きっと追大に来ていなかったら、弁護士にはなっていなかったでしょうね。空手をするために追大に入学し、大学院で田中先生と出会って視野が広がり、その研究室で妻に出会ったからこそ弁護士への道が拓けたのだと考えています」。

2013年に独立して事務所を構えた手塚さん。これからは、心理学を活かした弁護士の道を模索していきたいと考えています。“やろうと思えばできる!”ということを教えてくれた追大での経験を活かして、新しい弁護士のスタイルを構築されることでしょう。



**手塚 大輔さん**  
Daisuke Tetsuka  
1993年卒業(24期生)  
文学部心理学科(現・心理学部)  
1997年大学院(文学研究科心理学専攻修士課程)修了  
●弁護士  
●大阪上本町法律事務所  
tetsuka@osakauehonmachi-law.jp

f 手塚大輔 絵案



恩師・中谷先生(中)と川上さん(右)

オフィスでの川上さん

## 気づきいただいた恩師を目標に 社会に貢献できる公認会計士の理想像を これからの人たちに継いでいきたい。

「とにかく僕は落第生でしたから…」笑いながら、追大第一号の公認会計士である川上さんは、学生時代の思い出やこれからの夢を語ってくださいました。「父は公認会計士でしたが、僕自身あまり興味が持てませんでした。勉強もあまり好きではなかったので、会計士になるなんて夢にも思っていませんでした」。

そんな川上さんの意識が大変革を起こす人が現れました。当時、経済学部の教授をされていた中谷洋一先生です。先生は近畿会計士会の会長を務められた会計士の第一人者。中谷ゼミに入った川上さんは、日々目からウロコが落ちるのを実感します。

「先生は、講義の中で、たくさんのお話をしてくれました。その中で強く印象に残ったのが、つづれた会社の再生の話でした。僕の中に“会計士の仕事は、財務を見るだけでなく、企業に関わる社員や家族、取引先などすべてのステークホルダーを支援し守ること。つまり、世の中で役に立つこと”という意識が芽生え、はじめて“会計士になりたい”と思いました。それは、結局、父の仕事の継ぐことにもつながりました」。

中谷先生に“気づき”をもたらした川上さんは、卒業後、本格的に会計士を目指し、4年間で3千時間超という、これまで経験したことがない勉強をして、ついに合格率5%という超難関の公認会計士試験に合格。そして、中谷会計事務所に入社することができました。「中谷会計事務所での12年間の実績は、僕に“会計士とは何か”を徹底的に身に付けさせてくれました。今の僕の生涯の目標は“いかに中谷先生に近づけるか”です」。

現在、川上さんは、追大内で『会計人会』を組織する活動を進めています。その目的は、学生に会計士の魅力を伝えること、追大卒の経営者のお役に立つこと、追大出身の会計士に役割を啓蒙すること。今年度内に1コマの講義ができなかと模索中です。

「会計や税務、監査を行うだけでなく、経営の問題点を明らかにし、その改善策を提案・実施できるような会計士を育てたいものです。企業のすべてのステークホルダーを幸せにできるような会計士です。そんな会計士なら、必ず社会に貢献できるはず。そんな会計士を育てていくことが、中谷先生への恩返しになると思います」。

目的意識があれば、やる気は生まれる。やる気があれば、どんな困難なことでも達成できる。中谷先生からいただいた“世の中で役に立つ仕事をする”という川上さんの目的は、これから先も、どんな道に進んでも生きていくことでしょう。



**川上 章夫さん(旧姓 田倉)**  
Akio Kawakami  
1974年卒業(5期生)  
経済学部 経営学科  
●公認会計士  
●株式会社パルコンサル  
代表取締役  
http://www.pal-web.co.jp

f 川上章夫 絵案



## 五輪メダリストの次なる夢は シンクロナイズドスイミングの“楽しさ”を シニアや障がいのある人に広めること。

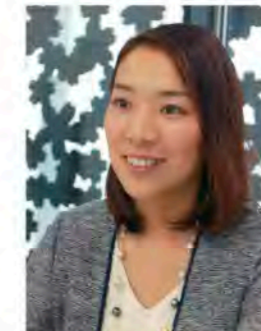
「考えてみたら、私って人生の半分は追大で過ごしているんですね!」大きな瞳をいっそう見開いて巽さんは感慨深げに語りはじめました。「学生時代、職員時代、現在の教員時代の18年間を通じて、本当に追大にはお世話になってきました。だから、誰よりも追大のことを知っているつもりです。巽さんは、3歳で水泳をはじめ、7歳でシンクロナイズドスイミングに転向。追大3回生の2000年にオリンピックシンドニー大会のシンクロ代表に選ばれて参加し、銀メダルを獲得しました。続く2004年、追大職員だった時のアテネ大会では代表のチームリーダーを務め、見事連続で銀メダルを獲得しました。あの井村コーチの下、日々、想像を絶する練習に明け暮れた成果でした。彼女にとってシンクロは、あくまでも楽しい競技であり、楽しむためのものではなかったといえます。辛い練習の日々の中、彼女を支えていたのが追大の仲間や先生たちでした。2013年、彼女は追大職員を辞して、大阪体育大学の大学院へ進みます。

「昔から指導者になるのが夢だったんです。きっと現場が肌に合っているんでしょうね。そして、晴れて追大の教員に。現在は講師としてコーチング論やスポーツ概論の講義、体育の実技などを行っています」。

現在、彼女が注力しているのは、研究テーマでもある『マスターズ・シンクロ』と『障がい者シンクロ』。職員時代にあるシンクロコーチからマスターズ・シンクロの指導の手伝いを頼まれて出かけたところ、練習する人たちの笑顔の輝きに驚嘆したそうです。「あー、シンクロって、本当はこんなに楽しいものなんだ!」ということに、初めて気がつきました。シンクロって、人を笑顔にする力があるんだということを実感したんです」。

以来、彼女はマスターズ・シンクロクラブのヘッドコーチを務めています。「最高齢の方は85歳。シンクロ歴30年という方もいらっしゃいます。ほとんど私の人生と変わらないキャリアなんです。毎回、いろんなことを教えてもらってます」。

今後は、障がいのある人のシンクロにも関わっていきたくて考えている巽さん。東京パラリンピックでのデモンストレーション実施を実現するのが夢だといえます。いつの日か、“シンクロを生涯スポーツに!”という思いを胸に、彼女の奮闘が続いています。人生の半分以上を過ごしてきた追大については、誰よりも追大生気質を理解している自分だからこそできる指導をして、世の中に役立つ人材を育てていきたいと考えています。



**巽 樹理さん**  
Juri Tatsumi  
2002年卒業(33期生)  
経済学部 国際経済学科  
●五輪メダリスト  
●追手門学院大学  
基礎教育機構 講師

f 巽樹理 絵案